

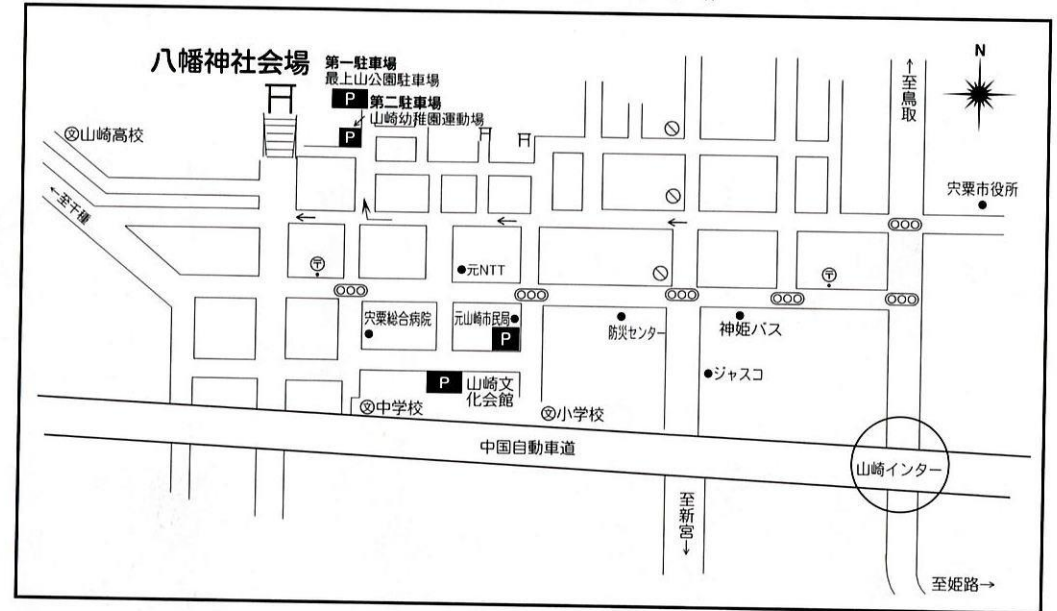
第二十回記念

薪能



# 山崎八幡神社奉納

## 《会場略図》



※ 今回、薪能終了後の姫路行きバスの運行はありません。

と き 平成30年9月29日(土) 【小雨決行】

と ころ 宍粟市山崎町 山崎八幡神社 能舞台  
(台風等の不測の場合は山崎文化会館)

第 一 部 宍粟市謡曲同好会 午後1時00分始

第 二 部 薪能奉納 午後5時00分始

主 催 山崎八幡神社薪能奉賛会

後 援 宍粟市・宍粟市山崎文化協会・宍粟市教育委員会

神戸新聞社・宍粟市商工会・しそく観光協会

龍野ロータリークラブ

協 賛 宍粟市謡曲同好会

入場無料



平成30年、兵庫県は成立150周年を迎えます。この節目にあたり、ふるさと兵庫を再認識し、新たな兵庫づくりを考える機会とするため、当該事業を実施します。

## 山崎八幡神社薪能奉賛会

事務局 宍粟市山崎町山崎386

(神戸新聞山崎販売所 三谷新聞舗内)

TEL (0790) 62-2266

※ 今回、薪能終了後の姫路行きバスの運行はありません。

## 第二十回記念薪能の開催にあたって

天高く馬肥ゆる秋天の今日、第二十回記念山崎八幡神社奉納薪能が開催できますことを大変有り難く存じあげますと共に、宍粟市内外の企業をはじめとする篤志の皆様にご感謝申し上げます、催行に関わる関係者の熱意とご努力に深甚なる敬意を表します。

特に初回より毎回手取り足取り御教導いただきました江崎正左衛門先生、江崎欽治郎先生を始め宍粟謡曲同好会の皆様そして財政を支えていただいた有志の方々のお陰でございます。

振り返りますと、この催しも昭和五十五年に当会初代会長の壺阪壽会長と二代目の山中陽一会長の呼びかけにより発足し、今回二十回を迎えることになりました。元禄十二年に創建されて風月にさらされた能舞台も一篤志家の御奉仕により今日の立派な姿となり、平成十九年九月の第十五回薪能に合わせて竣工式が執り行なわれました。大変整備された環境の下での演能は誠に有難いものであります。今回は第二十回の演能を記念して地元で「ゆかり」のある演目を上演していただきます。深遠なる境で心ゆくまで御鑑賞下さい。

又第一部の宍粟謡曲同好会の皆様による謡曲・仕舞の披露も日頃の研鑽の成果であります。是非ご披見いただきご支援の程お願いします。

秋の夕べ、しばし幽玄の世界に遊泳お楽しみ戴きますことを祈念申し上げご挨拶申し上げます。



山崎八幡神社薪能奉賛会

会長 安井 克典

第一部 穴栗謡曲同好会番組

(午后一時始)

一、独吟・波賀翠謡会

船弁慶

鴨越八嶋の語

松本 繁信

三、仕舞・鶴崎観和会

野宮

宗接久美子

蝉丸

春名 芳子

玉鬘

田中 洋子

鶴崎 和美

松虫

キリ

山國 重代

二、素謡・波賀翠謡会

井筒

シテ 西中登美子

清水 康博

ワキ 中田 勇

松本 繁信

高所 耕三

四、素謡・山崎篠謡会

砧

いざいざ砧ヨリ

シテ 上田 博子

原 忠雄

ワキ 鳥越 茂

上田 隆雄

ツレ 原 みち代

山崎きよ子

小瀬七五三男

五、素謡・梅谷鍊成会

蝉丸

シテ 大前 弘司

秋武 春生

ワキ 大前 強

篠原 宗平

ツレ 玉田 勝人

七、連吟・山崎集杉会

鐵輪

中入アト

井口 和榮

村尾 裕

加藤 昭彦

輪三渡 圭介

中谷 裕子

三谷 恭三

吉本 晃

下村 弥

杉浦 豊彦

小泉 啓展

塚田 清一

六、仕舞・山崎集杉会

敦盛

キリ

中谷 裕子

葛城

キリ

有坂 靖子

杉浦 豊彦

岸本 通哉

第二部 薪能奉納

(午後五時始め)

本日の能の解説

能楽協会神戸支部  
山崎八幡神社宮司  
薪能奉賛会

林本大  
根岸敬佑  
三谷恭三

観世流 能 楽

藤谷音彌  
笠田昭雄  
上田貴弘

三笑

山下守之

大鼓 辻 芳昭 太鼓 上田 悟  
小鼓 久田 舜一郎 笛 齋藤 敦

松井美樹 笠田祐樹 上田大介  
吉井基晴 上田宜照 上田拓司  
林本大 大西礼久

火入式

挨拶 薪能奉賛会会長  
祝辞 宍粟市長  
祝辞 兵庫県議会議員  
安井克典  
福元晶三  
春名哲夫

仕舞

老松 大西礼久

上田顕崇  
今村哲朗  
久保信一朗  
伊藤裕貴

狂言

口真似 太郎冠者 茂山 千五郎

主人 松本 薫  
客人 茂山 茂  
後見 山下守之

観世流 能 楽

松野浩行  
笠田祐樹  
上田宜照  
杉浦豊彦

紅葉狩

大坪賢明  
江崎正左衛門  
江崎欽次郎  
和田英基  
松本義昭

大鼓 辻 雅之 太鼓 上田 悟  
小鼓 久田 陽春子 笛 齋藤 敦

井口竜也 林本大  
茂山茂 上田拓司  
伊藤裕貴 上田大介  
今村哲朗

附祝言 閉会の辞 薪能奉賛会副会長

鶴崎和美

(終了予定 午後八時半頃)

※会場内での写真撮影・録画、録音は、堅くお断わりいたします。  
また携帯電話の電源はお切りください。

## お祝いのことば



宍粟市長 福元 晶三

秋冷の候、山崎八幡神社新能奉賛会主催「第二十回 新能」が厳肅かつ盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

昭和五十五年より開催されております「新能」も、今回で節目となる二十回目を迎えられること。この間、台風等の影響により開催が危ぶまれる事象もあったことと存じますが、山崎八幡神社新能奉賛会の皆様をはじめ関係各位の並々ならぬ熱意のもと、こうして回を重ねられ歴史を紡いでこられました。ここに改めて敬意を表し感謝を申し上げます。

さて、新能の歴史は大変古く、その起源は平安時代に遡るといわれています。夜の帳のなか、かがり火に浮かび上がる能舞台で演じられる能は、見るものを魅了してやまない独特の世界観に溢れています。また、悠久の歴史が漂う「山崎八幡神社」と由緒ある「山崎八幡神社能舞台」が、この世界観に奥行きを醸しだし、野外という開放感と相まって初心者から見識のある方まで誰もが楽しめる空間を演出してくれています。

近年、能や歌舞伎など「伝統芸能」への関心が高まりを見せる一方で、後継者・担い手不足も課題として挙げられています。こうした伝統芸能を、後世に引き継いでいくためには、より多くの方に鑑賞いただき、その素晴らしさを直に感じ取っていただくことも重要であり、その意味において本日は、またとない貴重な機会と言えましょう。

今宵は、様々な表情に見て取れる能面、華麗な装束を身に纏ったシテ方やワキ方、独特の音階を奏でる謡と囃子等々、幽玄の世界を心行くまでお楽しみいただければと思います。

宍粟市におきましても、先人達が築き上げてこられた歴史や文化を次世代に継承していくことを目指し、地域に根差した芸術・文化活動を充実し、その保存と環境の整備を推進してまいります。

山崎八幡神社新能奉賛会の皆さまには、「新能」の継承並びに普及発展を通じて、宍粟の文化向上にもお力添えを賜りますよう、今後ともよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、山崎八幡神社新能奉賛会の今後益々のご発展と、関係各位のご健勝とご活躍を祈念し、お祝いのことばとさせていただきます。

## お祝いのことば



兵庫県議員 春名 哲夫

第二十回を数える山崎八幡神社新能の盛会を心からお祝い申し上げます。

本年は明治維新と時を同じくして、兵庫県行政が発足して一五〇年でありました。一五〇年前、歴史に名を残した若者たちの果敢な勇氣と行動がきっかけとなり、先人たちの確かな判断で近代国家が建設されました。先人の皆さんに感謝申し上げます。

現在は人工知能（AI）が人間の領域まで入り込む第四次産業革命とも言われております。しかし明治以降増加してきた人口は少子化により人口減少・高齢化が進み長期の人口減少局面に入りました。人口増から経験のない人口減少社会であります。よって兵庫県にとっても新たな社会に対応できる環境を築かなければなりません。兵庫県政一五〇年を機に大きな変革の年と言えましょう。

しかし約六五〇年の歴史を持つ世界最古の古典演劇であります新能は、数百年もの間、台本や演出から装束までほとんど形を変えないで引き継がれてきた事に、敬意を表しながら、今後もありのままを引継ぎ守らなければなりません。

由緒ある山崎八幡神社新能も一九八〇年に第一回が開催されてから三十八年を経て、今年は第二十回を数えます。これもひとえに、山崎八幡神社新能奉賛会の安井克典会長をはじめ、ご関係の皆様のおかげで、我々地域の伝統文化として定着しております事に、心からお喜びと感謝を申し上げます。

私は今回で四回目の能舞台を拝聴いたします。今回は一層心を落ち着かせ、自身の目に映るものを味わいながら、かがり火の基で何とも言えない幽玄の世界を今年も楽しませていただきます。

今後とも山崎八幡神社新能奉賛会のさらなるご発展と、皆々様の健勝とご活躍を祈念いたします。お祝いの言葉とさせていただきます。

# 演目解説

## 観世流

### 能楽 三笑

東晋時代(五世紀)。中国南方の廬山に庵を建てて隠棲していた慧遠禅師(シテ)のもとに、ある日、親友の陶淵明(ツレ)と陸修静(ツレ)が訪れます。三人は近くの滝などを眺めて風雅な情景をたたえ、庵の周りに生えている菊の花を愛でて酒を飲み、興に乗じて舞を舞うなど、至福の時を過ごします。やがて二人が帰る刻限となったので、禅師は見送りに出ますが、庵から遙か遠くまで来たところ、禅師が年来庵から離れないという誓いを立てていたことを思い出し、三人はどつと笑います。



## 狂言 口真似

ある人から銘酒をもらった主人は、一人で飲むのもどうかと、酒の相手にして面白い人を呼んでこいと太郎冠者に言いつけます。そこで、太郎冠者が呼んできた人は有名な酒乱の人物。

と言って、追いつ返す訳にもいかずもてなす事になるのですが、太郎冠者が粗相をしてご機嫌を損ねられては大変だと、主人は太郎冠者に「私の言う通りにしなさい」と言いつけるのですが・・・後の展開は題名にもなっているの、もうお判りですね。

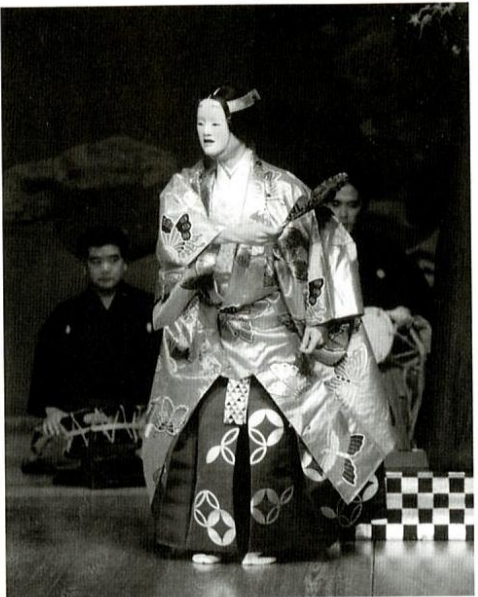


撮影 上杉 遥

## 観世流

### 能楽

### 紅葉狩



旧暦九月の、紅葉が美しいとある山中にて。高貴な風情をした女が、侍女を連れて、山の紅葉を愛でようと暮を打ち廻らして、宴を催していました。その酒席に、鹿狩りの途中であった平維茂(たいらのこれもち)の一行が通りかかります。維茂は、道を避けようとはしますが、気づいた女たちに「是非ご一緒に」と誘われるまま、宴に加わります。高貴な風情の女はこの世の者とは思えぬ美しさ。酒を勧められ、つい気を許した維茂は酔いつぶれ、眠ってしまいます。それを見届けた女たちは、いずこにか姿を消してしまいます。



ちょうどそのころ、八幡大菩薩の眷属(けんぞく)、武氏の神が先の山(実は信濃国戸隠山)への道を急いでいました。維茂を篋絡(ろうらく)した女は、戸隠山の鬼神だったのです。武内の神は、維茂の夢に現れてそのことを告げ、八幡大菩薩からの下された神剣を維茂に授けました。さて、夢から覚めた維茂の目の前には、鬼女が姿を現し、襲いかかってきます。維茂は勇敢に立ち向かい、激しい戦いの末に、みごとに神剣で鬼女を退治しました。

演者紹介

シテ方 観世流

上田 貴弘	上田家当主 重要無形文化財総合指定保持者	上田家
上田 拓司	重要無形文化財総合指定保持者	上田家
笠田 昭雄	重要無形文化財総合指定保持者	上田家
藤谷 音彌	重要無形文化財総合指定保持者	上田家
上田 大介	重要無形文化財総合指定保持者	上田家
伊藤 裕貴		上田家
笠田 祐樹		上田家
上田 宜照		上田家
上田 顕崇		上田家
久保 信一朗		藤井家
杉浦 豊彦	杉浦家当主 重要無形文化財総合指定保持者	杉浦家
松井 美樹	重要無形文化財総合指定保持者	杉浦家
大西 礼久		大西家
今村 哲朗		大西家
松野 浩行		林家
吉井 基晴	吉井家当主 重要無形文化財総合指定保持者	吉井家
林本 大		山本家

ワキ方 福王流

江崎 正左衛門	重要無形文化財総合指定保持者	江崎家
江崎 欽次朗	重要無形文化財総合指定保持者	江崎家
和田 英基		江崎家
松本 義昭		江崎家

大坪 賢明

江崎家

狂言方 大蔵流

茂山 千五郎	重要無形文化財総合指定保持者	茂山家
茂山 茂	重要無形文化財総合指定保持者	茂山家
松本 薫	重要無形文化財総合指定保持者	茂山家
山下 守之		茂山家
井口 竜也		茂山家

囃子方

小鼓方 大倉流

久田 舜一郎	重要無形文化財総合指定保持者
久田 陽春子	重要無形文化財総合指定保持者

大鼓方 大倉流

辻 芳昭	重要無形文化財総合指定保持者
辻 雅之	重要無形文化財総合指定保持者

太鼓方 金春流

上田 悟	重要無形文化財総合指定保持者
------	----------------

笛方 森田流

齋藤 敦

八幡神社奉納新能の記録

回	年月日	1	2	3	4	5	6
昭和	55・10・4	羽衣	鉢木	三井寺	弱法師	翁	1 平成 9・9・16
観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流
上田照也	上田照也	浦田保利	杉浦元三郎	面箱松本 薰 三番叟 茂山千五郎 千才 観世清和	江崎正左衛門	江崎正左衛門	江崎金治郎
柿山伏	瓜盗人	水掛罨	昆布売	二人袴	呼声	石橋	丸石やすし
狂言	狂言	狂言	狂言	狂言	狂言	観世流	観世流
茂山千五郎	茂山正義	茂山あきら	伊藤忠三郎	木松茂山 千三郎 村本千五郎 薫	丸山千之丞 山あきら	藤井徳三	藤井徳三
土蜘蛛	紅葉狩	小鍛冶	葵上	狸々乱	殺生石	安達原	殺生石
観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流
江崎康雄	杉浦元三郎	大西智久	大西智久	大西智久	大西智久	藤井徳三	藤井徳三

回	年月日	7	8	9	10	11	12	13
昭和	55・9・21	経正	鶴亀	吉野天人	安宅	高砂	巻絹	15・9・6
観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流
大西智久	井上嘉久	坂口信男	大西智久	杉浦豊彦	笠田昭雄	杉浦元三郎	江崎金治郎	江崎金治郎
瓜盗人	口真似	蝸牛	素袍落	萩大名	寝音曲	伯母ヶ酒	殺生石	殺生石
狂言	狂言	狂言	狂言	狂言	狂言	狂言	観世流	観世流
茂山正義	丸山真吾	善竹忠重	茂山千作	松茂山千作	茂山千作	茂山千五郎	杉浦豊彦	杉浦豊彦
安達原	土蜘蛛	野守	岩船	井筒	俊寛	殺生石	殺生石	殺生石
観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流	観世流
藤井徳三	藤井徳三	波多野晋	上田貴弘	大槻文蔵	上田富康	杉浦豊彦	杉浦豊彦	杉浦豊彦

演

目



	19	18	17	16	15	14
	27 ・ 9 ・ 26	25 ・ 9 ・ 28	23 ・ 9 ・ 3	21 ・ 9 ・ 5	19 ・ 9 ・ 1	17 ・ 9 ・ 3
	清 <small>觀世流</small>  經  和杉 田浦 英豊 基彦	咸 <small>觀世流</small> 陽  宮  江上 崎田 敬貴 三弘	千 <small>觀世流</small>  手  江大 崎西 敬礼 三久	杜 <small>觀世流</small>  若  江大 崎西 金礼 治久	西 <small>觀世流</small> 王  母  江井 崎上 金裕 治久	張 <small>觀世流</small>  良  江藤 崎井 敬徳 三三
	萩 <small>狂言</small>  大名  茂茂 山山 宗千 彦三郎	鬼 <small>狂言</small>  瓦  井茂 口山 竜也 茂	寝 <small>狂言</small> 音 曲  茂茂 山山 正千 邦五郎	魚 <small>狂言</small> 說 經  茂茂 山山 千千 三三 五五 郎郎	伯 <small>狂言</small> 母 々 酒  茂茂 山山 七千 五五 三三 郎郎	貫 <small>狂言</small>  聳  茂茂 山山 千千 作五 郎郎
	羅 <small>觀世流</small> 生 門  江上 崎田 欽拓 次司	鞍 <small>觀世流</small> 馬 天 狗  江杉 崎浦 金豊 治彦	融 <small>觀世流</small>    江杉 崎浦 金豊 治彦	雷 <small>觀世流</small>  電  江杉 崎浦 敬豊 三彦	正 <small>觀世流</small>  尊  江大 崎西 敬智 三久	船 <small>觀世流</small> 弁 慶  江杉 崎浦 金豊 治彦

# 謡曲十徳

謡曲を通して得ることが出来る効能をご紹介します。

- 一、行かずにして名所を知る
- 二、旅にありて知音を得る
- 三、習わずして歌道を知る
- 四、望まずして高位と交わる
- 五、詠めずして花月を望む
- 六、老いずして古事を知る
- 七、友なくして閑居を慰む
- 八、觸れずして仏道を知る
- 九、恋せずして美人を思う
- 十、薬なくして鬱気を散ず



- ・現代病と云われる鬱気を晴らし、ストレスを解消する
- ・肺機能を高め、咽喉を強める
- ・食欲が増進し、胃腸の働きを活発にする
- ・集中力を養い、脳の働きを増進する（老化防止）
- ・自ずから礼節を身につけ良識を得る
- ・温故知新、文学、歴史を学び知識と新しき発想を得る
- ・孤独をも慰め、広く知己を得る
- ・美しき日本語に接すると共に、発音は正確、美声となる
- ・芸術の深さを識り、感性に富んだ美を追求し表現する
- ・現実の世界を離れ、中世における演歌とも云える謡曲を吟ずる

山崎八幡神社能舞台（元禄12年〔1699〕建立）のご紹介



当舞台に於いて旧くは山崎藩主本多公の奉納新能又、昭和55年より平成25年にかけて奉賛会による新能が18回にわたり開催されました。

300年余の風雪にたえて尚建立時のたたずまいを十分にしのばれる長い歴史をもった由緒ある舞台でしたが、老朽化が著しく、平成19年に大改修工事を施した結果、新装なった舞台は入母屋造り、3間四方の本舞台に後座・地謡座・橋掛りを備え、鏡の間を兼ねた約18坪の楽屋を併設するものです。

# 能 薪 祝

## ご協賛者ご芳名

宍粟市山崎文化協会様	栗山章様
宍粟市商工会様	伊野操治様
龍野ロータリークラブ様	波賀翠謡会様
鹿島建設株式会社様	梅谷錬成会様
兵庫県神社庁宍粟支部様	鶴崎観和会様
江崎福王会様	山崎集杉会様
姫路薪能奉賛会様	山崎篠謡会様
吉本商店様	
篠原宗平様	
塚田清一様	

※八幡神社奉納の第二十回薪能の開催に当りまして、いつもながら格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできませず、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていることでもあります。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。